慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スコット・ ニアリング著 東欧の社会主義
Sub Title	
Author	平野, 絢子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.4 (1963. 4) ,p.373(81)- 374(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19630401-0082
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630401-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

住谷一彦著
『共同体の史的構造論
——比較経済社会学的試論——』

本書は著者が学窓を出てから十年余の間に発表した「共同体」に関連する論文十篇を収めたものである。「序章」＝「共同体論の定位——日本資本主義分析に関連して——」は、資本主義の成立過程に於て必ず直面する共同体の解体又は消滅の問題をとりあげ、各国資本主義の発達程度ならびに与えられた歴史的・文化的諸条件との関連において当該資本主義の形成を担った社会層の歴史的性格および関心の指向性によってさまざまでありえたし、またそれこそが問題の解決に実践する階級的主体の視角そのものを内側から決定した。現代日本経済における一層の工業化の進展にとって「共同体」の解体の問題は、国内市場の狭隘さや二重構造の問題と深く関わりあっているし、旧「共同体」の解体——新しい共同体の形成（本書では別の機会に扱うとして割愛している）という問題をも含めて、共同体論の現代的意義を論じておられる。

「前篇」は「共同体論史研究」と題されて「マックス・ウェーバーにおける『資本主義の精神』——『共同体』解体の起点——」と、「マックス・ウェーバーの『共同体』論——ウェーバー社会学の基礎概念——」と題する、中国・印度・オリエントなどのアジア、イスラエル・ギリシャ・ローマ、ゲルマン等の共同体の諸形態を発展的・段階的に把握せんとした論文、次いで「集団類型論の歴史的展開——『共同体論』の視角から——」と題するテンニース・デュルケム、マッキーバー及びウェーバーの集団類型・共同体論の三篇を収める。「後篇」は、「序論」として「『共同体』の諸形態」を論じ、次いで共同体の歴史的諸形態の原型たるべき「原始共同態の土地所有」を扱った第一論文、アジア的専制主義の社会経済的基盤をなす「灌漑社会の成立」論、文化人類学の業績（スチュワード「灌漑文明」やウィットフォーゲル「東洋的専制主義」など）を紹介した「古代社会の諸問題」、サン・ヂェルマン・デ・プレ修道院所領明細帳を中心にして共同体の細胞たる家族の構造を究明した「ゲルマン的共同体の家族構造」、信州蓼科山麓の調査をふまえた「村落共同体と用水強制」論、終章には「日本農村社会学の『共同体論』分析」を収める。

全篇を通じて日本資本主義の底辺をなす共同体を比較社会学的に分析せんとしている。叙述は懇切丁寧、共同体論の現状を知るに好適である。（有斐閣・A5・三八一頁・一六〇〇円）

—中村勝己—

＊　＊　＊

ルートヴィヒ・ボイティン著
大岩信太郎・林　達　訳
『経済史学概論』

この訳書の原著については私自身かつて一読したことがあった。いま邦語に移されたものに接し、訳者らのご努力を多とすること切なるものがある。この種の著作で訳文に流麗を期すことは困難であるが、訳者らの謙遜にもかかわらず、その点が見事に克服されているのは喜ばしい。経済史をどう扱ったらいいか。終始これは私たち経済史学徒を悩ます問題であるが、そのための一つの処方箋といったらいいものを、手近かなところまで届けてくれた訳者らに対し深く感謝しなければならない。なお巻末には解説が付してある。読者はこれによって原著の主張するところの大体を知ることができ、かなり便利である。

経済史の研究対象が経済現象であるということに異論を差挟む余地はない。しかし問題は経済現象を生活のなかでどう位置づけるかにあった。著者は経済を文化の全体関連のなかでみる。経済は現実のただ一部分でしかないというのであった。経済はかかるものとして生活の大抵の部門に対し強い影響力を持っていた。しかし著者によれば、経済だけが根本において生活の全体を規定するというのではない。かくて経済現象をその本来の位置において理解するということが必要になって来る。著者において経済史はいわば歴史学の一部門として把握されることになったのであった。しかし著者は経済史を歴史学のなかに深く埋没せしめるということで満足しない。経済史は学問一般が有する教化的価値以上の力を持つ。著者はかかる観点から経済史に対し積極的な役割を与えようとした。不断の努力によって世界を快適な場所に仕立てなければならない。著者はここに人間の経済的営みの本質をみた。経済史は経済現象を取上げるということで実にこの果しない営みを跡づけ、そしてこれによって世界を形成する労働の価値の偉大さを示すことを究極の課題としていたのであった。もはや経済史家が国民教化の事業をおわされていることは明白であった。これを果すためいかに振舞ったらいいか。いわばそのための指針を著者はここで与えようとしたのであった。しかしこの段階でそうした問題が繰返し提起されなければならない事情は重要である。実にこれはドイツの経済史学が戦後その指導的地位を奪われたという憂うべき認識から発した。経済史をどう扱ったらいいか。これに対する解答を通じて著者はドイツの経済史学が持つ伝統的な強みを示し、ドイツの学界に充満する敗北感の一掃という実践的課題を果そうとしたのであった。原著は Ludwig Beutin, Einführung in die Wirtschaftsgeschichte, Köln, 1958.（学文社・昭和卅七年五月刊，A5・一六二頁・六五〇円）

—渡辺國廣—

＊　＊　＊

スコット・ニアリング著
『東欧の社会主義』

本書は半世紀以上を米国社会主義運動に生きたベシルバニア生れの生粋のアメリカ人、Scott Nearing のみた東欧社会主義の素描である。原名を "Socialism in Practice", ——transformation in east europe——と呼ぶ本書の内容は、一、社会改革の開始、二、財産所有関係の変化、三、経済的、社会的計画、四、東欧経済圏の経済的均衡、五、社会主義的政治形態の型、六、新旧圧力団体、七、教育革命、八、社会保障、九、東欧における文化革命、十、最近二十年間の収支決算表、十一、若干の問題、十二、社会主義の将来、にわかれているが、ここからも認められるように、読者は単にアメリカ人の書いた社会主義諸国に対する無偏見の究明という外面的な興

味からいつかその鋭いひらめきに充ちた正攻法にひき入れられてしまうであろう。

著者は社会主義経済といえばソビエト連邦、せいぜいアジアにおける動きしかニュースとしても知らない〝西欧の人々〟にとって、東欧における最近の社会主義経済の発展とその変化を知ることは平和のためにも是非必要であると確信し、ブルガリア、チェッコスロヴァキア、東独、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ユーゴースラビアを訪れる。そして彼はこの一九六二年の冬の旅から、東欧社会主義諸国は如何なる点に失敗したか、いかに西欧の生活より低いところから出発したか（これは資本主義経済と社会主義経済との間の経済成長の比較の場合いつも持ち出される――筆者）ではなく、〝東欧の民衆〟は何をし、何をしようとしているか。最少の損失と最大の効果を期待しつつ封建的資本主義であった後進国がいかに進んだ社会主義に移行しようとしているかを考察し、それを世に問おうとするのである。月刊 "World Events" の定期寄稿者である著者は〝自由競争に支配される私的企業の社会経済体制〟から、協同的・調整的な、従って当然計画的な社会経済体制への移行過程で、封建的規制の下にある農村地帯と資本主義的様式の下にある都市部とにおいてそれぞれの場で〝古い伝統的な〟〝財産所有の型〟を打ち破り、いかにして、新しい〝社会的な〟経済発展の途に乗り入れたか、新しい国家的というよりは協同組合的スーパーマーケッドがいかなる形で農村に発展したか、保健行政がなぜ大衆の予防医学を浸透させたか、科学と技術がいかに学校や研究所だけでなく現場において発展し、東欧の民衆にとってそれがいかに望ましいかを理路整然と淡々と語る。この〝変化〟の指摘が不思議に押しつけがましくないのは、言葉の背後にある分析の確かさから来るのであろうが、〝後進性〟の中に生活し、〝後進性〟の〝分析〟に明け暮れている我々非西欧民衆にとっては、後進性の打破の実現の強調の他に、そこに必ずあらわれる後進性の経済発展の不均衡とその当面する困難、その打開の各国の違い、そしてその中でのヨーロッパ的特質をえぐってほしかったと欲張ったことを考える。中国と言わずともアジア、中南米、アフリカにも社会主義的方式を展望する後進国がないわけではないのであるから。（ニューヨーク、ニューセンチュリーパブリッシアース・一九六二年刊・B6・一〇四頁・二弗五〇仙）

―平野絢子―

＊　＊　＊

C・N・パーキンソン著
福島正光訳

『かねは入っただけ出る』
―パーキンソンの第二法則―

「かねは入っただけ出る。だから歳入にたいしてある絶対的な限界を設け、それに応じて国家経費をはかれ」――これが「パーキンソンの第二法則」の含意である。世界で最も税負担の重い現代英国が俎上にのせられ、巨額の国家経費がいかに浪費されているか、また巨額の税金がいかに脱税のための才能と時間の浪費を生みだしているかについて、イギリス紳士特有の粘っこい筆鋒で痛烈に論難される。これは博学な街の財政学者が書いた小気味のよい財政評論集だと思えば、当らずといえども遠からずである、漫画と逆説、饒舌と真実が錯綜して、読者はときにキリキリ舞いの憂き目にあうかもしれないが、論述は論理の錯乱でもなければ錯乱の論理でもなく、かえって現代財政の疾患をいやというほど思いしらしてくれる。

役人の数はなすべき仕事の軽重、時には有無にかかわらず、一定の割合で増加する――これは周知のパーキンソンの第一法則である。少なくともヨーロッパでは、読書に趣味ある人でこの法則を知らない人はない。わが国でも同様であろう。けれども二・三年前までは、この法則を知らなかったばかりに、ヨーロッパで赤面した日本人も少なくなかった。F氏もその一人である。たまたま徴税費についての質問に答えてくれた人が、「それはパーキンソンの法則にしたがいますネ」、というなり周囲の人達が笑声を挙げたにもかかわらず、質問者のF氏がはじめて耳にする名前と法則に首をひねっていた。もちろん彼は下宿に帰るや、その夜はオランダ風の固い椅子に腰を下して、「パーキンソンの法則」と銘うった奇妙な書物と取組んだ。

とはいえ、第二法則は第一法則に続くものであるが、どちらも固い椅子に腰を下して読まなければならないほどの書物ではない。まして、「平均課税の限界は、……国民所得の二〇パーセントにきめらるべきである」という言葉なら、成長めざましいどこかの国で叫ばれ、なんとはなく容認された形の命題でしかないはずだ。「手袋の裏もまた手袋」といった読後感しか残らない明敏叡智に恵まれた読者もないとはかぎらない。

けれども「わが眼のうつばり」も、パーキンソンの鏡に映してみるべきである。株式配当や利子所得の安い税金、株式売買益のタダに近い税金にくらべて、勤労所得にかけられるいくつかの税金のなんと重いことか。「税痛」は欧米にくらべてわが国が少ないとは、だれが断言できようか。その上、わが国こそは「かねは入っただけ出る」ことにかけて、英国に少しもひけをとらない。「パーキンソンの第二法則」を信用するにせよしないにせよ、それは単なる寓話でないことは信用してよい。（至誠堂・卅七年十一月刊・B6・二八八頁・三八〇円）

―古田精司―

＊　＊　＊

小野朝男著

『国際通貨制度』

この二・三年来、国際通貨制度の再検討が行なわれ、多くの論議と改革の提案を生んでいる。しかしいまだ統一された見解は存在せず、一層の究明と整理の余地を残している。とくにこの問題は、主として近代経済理論の範囲内で論究されてきており、マルクス経済理論からの分析は殆ど存在していなかったといってもよい。

本書は、国際通貨制度に関する後者の立場からの始めての体系的な研究であり、大いに注目さるべき労作である。その目的は、国際通貨制度の真の姿を描くことにおかれ、原理（第一章の国際通貨の基本的概念の理論的考察）・段階（第二章の国際通貨制度の歴史的展開）・現状分析（第三・第四章の国際通貨制度の現状）を通じ、あるいはそれらに基づいて、国際通貨のあるべき姿（第五章）が考察されている。

まず国際通貨制度の基礎として、金の重要